

第7課「安息日の主」**日曜日「創世記における安息日」**

神の天地創造の第7日目が安息日になりました。創造の業は6日目で終わりました。「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった」創1：31。7日目に神は創造の完成を祝いその日を記念日、祝日にしました。時間を聖別したので誰でもその場で創造の神を思うことができます。6日目に命を授かった人間は、安息日の神との交わり、喜び、感謝をもって人生を始めました。創造主の偉大な御業は人間の幸福のためになされました。

月曜日「出エジプト記における安息日」

十戒の第4条は6日間働くことと7日目を休むことの両方を含みます。働きのための6日間は神の御心にかなっていることは安息日を覚えて聖とすることと同じに重要です。生活の糧を得るための仕事であっても、自分の利害のことだけを考えないで、創造主が人間のために良い環境を整えたように隣人の必要を考え、その方々のために創造的な関わり方をしましょう。創造的な関わり方とは、神の御性質の聖、義、善を行為にする接し方です。

火曜日「申命記における安息日」

申命記にはシナイ山で十戒が宣布されてから40年経過した後の出来事が書かれています。この時の会衆の中には律法が与えられた時、その光景の恐るべき厳粛さを理解できる年ごろになっていた者はほとんどいませんでした。その彼らに、モーセは「かつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が・・・あなたを導き出されたことを思い起こさねばならない」と神の戒めを復唱しました。申命記の十戒の第4条は贖いに焦点を当てています。「罪以後、それは天地創造と、再創造の予型である贖いと象徴となりました」（下から7行目）。神は人間の贖い、自由、平等のためにも御業を行います。

水曜日「イエスと安息日」(その1)

日曜日が第7日安息日にとって代わったのでしょうか。イエスは安息日になさった癒しの業をもって第4条が有効期限の終わりを迎えたと言いたかったのでしょうか。そうではありません。「安息日は愛のない律法、つまり苛酷な律法主義になっていました」（下から9行目）。イエスは「人が安息日のためにあるのではない」（マルコ2：27）と言いましたが、それは安息日のために人が苦しんでいる姿を実際にご覧になっていたから口にされたのです。イエスのいやしは痛み、悩みからの解放を通して神の憐れみを教えるためでした。

木曜日「イエスと安息日」(その2)

イエスは十字架で人間の罪を負い犠牲の死を遂げました。それは週の6日目、安息日の備えの日でした。十字架上の言葉「成し遂げられた」（ヨハネ19：30）は、贖い（再創造）の業を完了した勝利宣言です。創世記2：1-3と同じように御業を終えた次の日は安息日でした。キリストは墓の中で休みました。命の起源は創造、救いの起源は十字架、どちらもキリストにしかできないことでした。安息日は人間の救いが初めも終わりも途中も全て神の御業だということを思い起こさせてくれます。人間はキリストに頼るのみです。